

巻頭言 「メーリケの詩から」

宇野 元

エドゥアルト・メーリケという詩人がいました。19世紀のドイツの人。ゲーテより少し後の詩人です。小さな村の牧師でした。説教の務めが負担で、副牧師に交代してもらった、そんなのんびりした逸話を残しています。時代の中心から離れた所に生き、当然、ひろく知られることもなく亡くなりました。

クラシック音楽がお好きな方は、シューマンや、ヴォルフが曲をつけた詩の作者としてご存知かもしれません。彼自身、音楽と関わりがあり、『プラハへの旅路のモーツァルト』という小説を書いています。それはともかく、メーリケの詩には不思議な魅力があり、私たちの思考を一段掘り下げてくれるものがあります。

人は、そうありたいと思うほど、完全に
他者のものになれるだろうか？
ながい夜に、私はそんなことを思いめぐらした。
その答えは、「否」である。

私たち人間は、誰のものでもない。誰にも属さない。本来、自由な存在、独立した存在である。だから、私たちが抱えている交わりの必要は、人との交わりにおいて満たされるものではない！ よく味わうべきことが語られていると思います。これを受けて、次のように言うことができるでしょう。私をよく知る存在、私の周りにいる誰よりもよく知ってくれている存在、私自身よりも私のことを分かってくれている存在だけが、私の心の深い必要を満たすことができる。

聖書の詩から、私たちの心に響く言葉——

潤れた谷に鹿が水を求めるように
神よ、わたしの魂はあなたを求める。
神に、命の神に、わたしの魂は渴く。

詩編 42,2.3

私は、誰のものでもない。言い換えれば、私は家を求めている。神と共にある、それが家です。